

概要報告

実施期日	8月1日(金)
部会名	中学校 外国語部会

テーマ 『 言語活動の充実と言語材料の定着を図る指導の工夫 』

提案概要

○実践に向けての課題意識

受身的で自ら物事に取り組むという姿勢が弱い生徒に対してコミュニケーション能力の基礎を育成する必要があると感じ、手立てとしてワークシートの工夫、帯活動の充実、生徒間での会話練習などを行った。それらの活動の中で自信をもって英会話に取り組むことがさらにコミュニケーションへの意欲を高めることにつながると考え、実生活に沿った具体的な場面や状況を話題に設定したフリートークを取り入れた活動“Happy Talk”を帯活動として授業に取り組んで行った。

○実践の具体的内容

① “Happy Talk” について

帯活動として授業の最初の15分程度の時間を使い、「教師が提示した1つの話題についてペアで1分間会話した後、クラス全体の前でその会話の内容を報告する」活動を行った。昨年の9～12月に1年生で“Challenge English”（会話集の英語を時間内にできるだけたくさん言って覚える活動）を行い、教科書にも出てきた英語の会話を覚えた。基礎・基本の定着を図りながら、今年の1月から“Happy Talk”を始めた。2年生になってからもこの活動は継続して行い、会話する時間を2分間と1年生の倍にして行っている。また、発表する英文を1年生では1～2文程度としたが2年生では3～4文に増やしている。

② 米国のオーチャードスクールの生徒の来校について

今年の6月に米国のオーチャードスクールの生徒が来校した。米国の生徒の来校は昨年からわかっていたので、生徒は“Happy Talk”で様々な場면을想定して練習を重ねてきた。当日は練習成果を確認する機会であるとともに、ネイティブスピーカーと話すことでモチベーションを高める機会ともなった。

○成果と課題

- ・ “Happy Talk” を1年生で始め、2年生でも継続して行ったことで生徒が発表する英文が増えた。また、ワークシートに生徒は「難しかった」と1年生の時は感想にあげていたが、2年生では「前より多く話せるようになった」「1年生の頃に比べてスラスラ英語を言えるようになった」などを感想に多く上げるようになった。このことから生徒に「英語が話せるようになってきた」という自信がついたと考えられる。
- ・ 「“Happy Talk”を通してクラスメートの意外な一面を知ることができた」という感想が多く、生徒に好評であった。このことからクラスの人間関係作りにも役立っていると考えられる。
- ・ “Happy Talk” は導入部分である帯活動である。この活動に20分以上かかってしまうと、その授業内での展開・まとめという授業の流れが不自然になってしまう。毎回発表せずに最後にまとめた発表活動にするなどの工夫をして改善する必要がある。
- ・ 会話に進歩が見られない生徒もいる。会話や発表の内容に聞き手が興味を持つような工夫が必要である。
- ・ 飽きてきてしまう生徒もいるので第一段階では「発表できたらOK」、第二段階では「お互い向き合って会話し、メモや原稿を見ないで発表する」第三段階「文法的にも正しい英語を使った会話、発表する」などの段階を踏むことで常に次の目標を設定する必要がある。
- ・ 評価については学期に1回程度の会話テストやスピーチを行っている。質問されたことに対して答えるだけでなく自分から質問するなど“Happy Talk”を活かした、トピックに基づく会話や報告を取り入れたものにしていきたい。

- ・“Happy Talk”では「話すこと」に重きを置いているが活動内容から「書く」「話す」「聞く」活動も同時に行っている。だが「読む」という活動を取り入れることができていないので4技能のバランスを考えた指導の工夫が必要である。

質疑概要

質問：“Happy Talk”を帯活動で行ったことで通常授業ではどのような変化があったか。

返答：教科書の英文や通常授業で行われている内容が“Happy Talk”の中でどう使えるか（質問や返答に使えるか）を生徒が意識するようになった。

研究協議概要

研究協議の柱に①「意欲を引き出す言語活動の工夫について」、②「意欲を引き出す言語活動の具体的な評価方法について」の2つをあげた。その2つの柱について各自の学校での取り組みや考え方を班で協議し、発表した。

①「意欲を引き出す言語活動の工夫について」

- ・生徒をほめて意欲を引き出している。
- ・普段から基礎・基本の定着を図るが、特に、1年生では言葉のキャッチボールが2回や3回に増やせるように日々練習することが必要である。
- ・実生活または自分の生活に近いものにもとづいた内容をトピックにあげる。
- ・定着することを目的に相手を変えて同じトピックで活動する。
- ・ペアワークでなく、4人グループにすることで教え合えるようにする。4人では活動するペアとそれを評価するペアに分かれてできるので、生徒間での学習の高まりを図ることができる。
- ・多少の失敗も気にしないでできる雰囲気を作る。
- ・ALTと会話する場面を設定して達成感を感じさせる。

②「意欲を引き出す言語活動の具体的な評価方法について」

- ・発表内容、正確さ、伝えようとする意欲を評価する。
- ・会話テスト、単語テストをする。評価をABCで表すだけでなく次につながる具体的なコメント（アドバイス）を書く。
- ・スピーチの評価は基準を決めてABCで表しているが、生徒の頑張りや評価がずれることがあり、採点する側（教師）が揺らいでしまうことがある。
- ・スピーチでやった内容を定期テストに取り入れる。
- ・次の課題を見つけるための評価をする。また、その過程を評価する。

まとめ概要

- 生徒は場面を設定すると話すようになる。米国の生徒と日本の生徒とのやり取りの中で、日本の生徒が相手を気遣い、話をつなげようと工夫していた。フリートークは会話を続ける力が必要である。継続して行っている帯活動が米国の生徒との会話につながっていた。
- スピーチでは1年生に「意欲を高める」、2年生には「正確さ」を求め、3年生では「自分の考え、思いを入れて伝える」を目標に行うのが良い。“Happy Talk”は「会話から報告」という流れがある。これは今日の活動を振り返り、次につなげることができる。
- 英語を使ってコミュニケーションがとれることが大事である。文法はツールであり、ツールは練習が必要である。生徒は使えるようになると楽しくなり、意欲につながっていく。英語嫌いにさせないことも大切である。評価をするにあたってはビジョン（目標）が必要である。Can-Doリストを作成し長期にわたった学習到達目標が必要である。小・中・高、一貫したカリキュラムも、今求められている。
- 長い時間をかけてどう生徒が成長したかを見とれる発表で会った。今後も生徒に良い刺激や機会を与えていってほしい。